

仏教的国際関係理論 ——その展開と先島諸島の基地問題への適用可能性について——

清水 耕介* 陳 慶昌*

Buddhist Theory of International Relations: Its Development and Applicability to the Sakishima Islands Base Issue

Kosuke SHIMIZU*, Ching-Chang CHEN*

The Buddhist turn in international relations can perhaps be traced back to Chan, Mandaville and Bleiker's *Zen of International Relations* (Chan, Mandaville, & Bleiker, 2001). comprising 11 chapters, this is a International Relations is a monumental work of scholarship on Buddhism and international relations. Since then, there have been no major developments in the study of Buddhism and international relations. However, with the recent trend towards non-Western, Post-Western and Global IR, it is beginning to attract attention again as a new theoretical development beyond mainstream international relations theory. In this context, discussions incorporating Buddhist perspectives in particular are expected to develop in the future. In this paper, we would like to discuss the advantages and disadvantages of incorporating such Buddhist thought into the perspective of international relations. We begin by presenting an overview of the perspective of Buddhism and international relations. This will be followed by a discussion of contemporary theories of international relations, particularly theories of relations and their relationship to Buddhism. Thirdly, I will explain the aspect of Buddhism as an overlapping part of three distinct areas that have received particular attention in recent years: religion, philosophy and science. Finally, it discusses what contribution Buddhism can make to international relations and other disciplines through these three areas.

現代の国際関係理論 (International Relations Theory: IRT) は大きな転換期にあると言って良いであろう。2010 年前後を境に急激に台頭してきた関係性論は、非西洋型国際関係理論 (Non-Western IRT) の展開とシンクロしながら更なる展開を見せている。主流派の国際関係理論が主として西洋を中心に展開してきたこと、それが非西洋地域の国際関係を説明するどころか逆に侵食してしまっていたこと、結果的にそうした地域の国際秩序を不安定化させる要因となってきたことなどから、非西洋型の国際関係理論の必要性は 21 世紀に入った早い時期から叫ばれていた。初期の段階で注目されたのは主としてポストコロニアルな議論であり、西洋／東洋という枠組みがいかに私たちの思考プロセスをコントロールしてきたのか、という点が俎上に上げられた。

これに対して、2010 年前後を境に新たな展開が登場してきた。これが関係性論である。元々関係性論は 1999 年の Jackson & Nexon (1999) による構築主義の延長というイメージでスタートしたが (Jackson & Nexon, 1999), 2010 年以降は特に中国学派による儒教に基づく新たな国際関係理

* 龍谷大学国際学部教授

論として刷新された。この中国学派による新たな理論展開は米中対立という背景が大きな要因として考えられるが、それと同時に主として西洋で展開されてきた主流派の理論の西洋中心主義的な視点が明確になってきたことも要因として上げられるであろう。関係性論の展開が中国に留まらず、南米やアフリカ、中東、そしてもちろん南アジアにも見られることが、その証左と言えるであろう。更には、こうした非西洋的な理論展開を総まとめするものとしてアメリカン大学の Amitav Acharya が提唱する Global IR という考え方が登場している。これは非西洋型国際関係理論を Global IR という大きな傘に包含しようとするものであり、主流派の国際関係に多様な視点を取り込むことによって、より包括的な視野を提供しようとするものである。

これに対して、同時期に登場した脱西洋型国際関係理論 (Post-Western IRT) は、主流派の国際関係理論と非西洋型の国際関係理論を所与の対立構造として捉え、その対話を促進するのではなく、この対立の共犯関係を暴き、それを乗り越えるための理論展開を目指すものとして注目に値する (Behera, 2007; Shani, 2007, 2008; Shih & Hwang, 2018; Shimizu, 2018)。これらはこれまでの国際関係理論が前提としてきた世界観、存在論を批判的に捉え、その問題点を指摘するとともに、それらを乗り越えることを企図した理論展開と言えるであろう。そこでは道教や仏教、南アフリカの Ubuntu、さらには物理学の量子論などを援用しながら新たな存在論の構築を目指している。特に、本稿が注目する仏教的な展開は龍谷大学を中心に、台湾国立大学や国立中興大学 (台湾) などで展開している。

国際関係における仏教的な転回は、おそらく Chan, Mandaville および Bleiker の *Zen of International Relations* まで遡ることができる (Chan, Mandaville, & Bleiker, 2001)。11 章からなるこの本は仏教と国際関係についての研究の記念碑的著作である。それ以降仏教と国際関係についての研究は大きな進展はなかったが、しかし、近年の non-Western, Post-Western, Global IR の流れもあり、主流派の国際関係理論を超える新たな理論展開として再び注目され始めている。

仏教は宗派という意味でもアプローチという意味でも非常に多様であり、仏教を一つの纏まった思想体系として捉えることは非常に難しい。そこで本稿では、より政治的、哲学的、科学的クロスロードとしての仏教という側面に注目する。この側面は、non-Western, Post-Western, Global IR などの多様化に向けた一般的な理解を超えて、存在論や関係性に注目するからだ。そこでは、世界と人間との関わり合い方、世界の一部としての人間という視点から議論が進められる。この視点は近年特に注目を集めている国際関係における関係性論の展開と軌を一にしている。またその延長線上にある Pluriversality や Anthropolocene の議論とも必然的に呼応する。

Jackson & Nexon による最初の介入以降 (Jackson & Nexon, 1999)、この 20 年ほどの間、関係性についての議論は大きな展開を見せてきた (Nordin et al., 2019; Tamara A. Townsell et al., 2019; T. A. Townsell et al., 2021)。そして、関係性の議論は単に認識論の問題としてではなく、より広範な視点から存在論的な展開を見せてきた。これは主体や存在全般が他者との関係を通して作られる (もしくは強く影響を受ける) という関係性の議論全般に見られる前提からすれば当然のことである。関係性とは、単に自立した主体間に生まれるものではなく、その主体を構築するのだ。関係性論の最もラディカルな形では、主体自体は存在しない、すなわち私たちが考える (私たち自身を含めた) 存在は関係の網の目であって、必ずしも本質的に自立的に存在するものではないと主張される。逆に言えば、関係の網が無くなった時、網の目 (すなわち主体) は必然的に消滅する。その意

味で、本質的な存在は少なくともこのラディカルな関係性論においては論理的に不可能なのである。そしてそれは最近のアクターネットワーク理論や人新世についての議論へと繋がっていく。

関係を存在の中心に置く仏教的な視点から言えば、こうした関係性を通した存在論的な転回は必ずしも目新しいものではない。仏教にとって存在とは苦しみである。この苦しみを真正面から捉えた時、存在は関係性へと変換される。仏教にとっても存在とは関係性の結果私たちの前に現象するものでしかなく、それ自体は他との関係を抜きには存在できない。波という現象は波としては存在できない。波をバケツですくって持って帰っても、それは波ではない。ただの水でしかない。私たちは波である。波が波であることに固執すれば、それは苦しみを生み出すだけである。私たちは、水や風、時間や空間、観察者などの関係から生み出される現象であり、そのうちの一つでも欠ければ存在できないのである。

本稿では、こうした仏教思想における関係性論を国際関係の視点に取り入れることのアドバンテージやディスアドバンテージについて議論を進めたい。そこでまず、仏教の関係性と国際関係という視点の概観を提示することから始める。続いて現代の国際関係理論、特に関係性についての理論と仏教との関係に言及する。第三に近年特に注目されている宗教、哲学、科学という三つの異なると考えられる領域の重なる部分としての仏教という側面を説明する。最後に、仏教はこの三つの領域を通して国際関係やその他の学問にどのような貢献ができるのか、という点について先島諸島の基地の問題をケースとして取り上げ議論していきたい。

1. 仏教と国際関係

仏教と国際関係という文脈で、おそらく多くの人が思い出すのは、Chan, Mandaville および Bleiker による *Zen of International Relations* であろう (Chan et al., 2001)。現代の仏教と国際関係という研究領域から考えても、この著作は驚くべきクオリティーを達成している。そこでは見事に存在論と認識論との関係、安全保障という概念の儚さ、存在に固執する現代人の姿が禅を通して描かれている。仏教と国際関係の最初の出会いがこのような高い質を持っていたことは驚くべきことである。

William Long の *Buddhism and International Relations* もまた非常に広範な仏教についての知識が基礎となっている (Long, 2021)。その中でもアショカ王の統治については特に触れる必要があるであろう。アショカ王は紀元前 3 世紀の古代インドのマウリア朝の第三代の王であり、インド全体をほぼ統一した仏教に帰依した王である。アショカ王の法 (ダルマ) に基づく統治は、他宗教を疎外しないものであったと伝えられる。これはダルマが一つの宗教の信条ではなく、すべての人々に適用できるものであるという位置付けによる。この開かれた政治体制は仏教的な統治の理想型であり、今でも政治と仏教の重なるところでしばしば持ち出される。

これらの著作は仏教と国際政治という視点からは非常に有用であり、特に仏教についての深い知識を持っているわけではない一般の読者にも比較的読みやすいものとなっている。他方、最近になって国際関係という学問の中で特に注目されている関係性という視点から考えれば、仏教の持っている潜在的な可能性は非常に大きい。この観点は上記著作の中ではほとんど探求されていない。そこで次のセクションでは、特にこの仏教の関係性という側面に絞って議論を進めていきたい。

2. 関係性と仏教

国際関係における関係性についての議論はこの15年ほど非常に盛り上がっている。Jackson & Nexon のパイオニア的な論文である“Relations before the State”は驚くべきことに1999年という20世紀の最後に構築主義の新たな展開として登場した。この著作はおそらく初めて関係性を中心に置いた国際関係についての論考として、今でも高く評価されている。また relationality に特に注目した論考として Astrid Nordin et. al. によって編集された Cambridge Review of International Affairs のスペシャルイシュー (Nordin et al., 2019) や Tamara Trwonsell et. al. による International Studies Perspectives のフォーラム (T. A. Trowsell et al., 2021), 同じく Trowsell et. al. によって発表された e-ir の著作などがあげられる (Tamara A. Trowsell et al., 2019)。これらの著作では構築主義, 儒教, 先住民的な関係性などさまざまな関係性が取り上げられ, 国際関係理論の新たな一面が明確化されている。この流れは急速に展開しつつあり, 2024年の International Studies Association annual conference は“Putting Relationality at the Centre of International Studies”というテーマで開催される。

この中でも特に注目されてきたのは儒教を基軸とした関係性論である。これは Qin Yaqing に代表される中国の研究者によって展開されている議論であり, 儒教に埋め込まれた5つの関係性とそれに従った道徳論が中心となる (Qin, 2018)。すなわち, 主従, 父と息子, 年長と年少, 夫と妻, 友人といった関係である。この5つを見るとわかるように, 最後の友人関係を除いて縦の関係となっている。つまり, 儒教はヒエラルキーを中心とした社会像を前提としているのである。儒教にとってこのヒエラルキーは非常に重要なものであり, これを維持するために様々な儀礼が行われる。つまり, 儒教は為政者側のモラルとして継承されてきたと言えるであろう。国際関係という側面から考えれば, それは例えば朝貢体制のような非常に厳粛で固定的な儀礼的關係に見ることができ。江戸幕府以前の日本や琉球のような朝貢国は定期的に朝貢を行い中華帝国 (例えば明や清) に対して一定の礼儀を示す。これに対して帝国側は朝貢の数倍の土産を渡し, その権威を見せつける。この儀礼は帝国の維持にとって非常に重要なものであり, この儀礼を通して東アジアの政治的な安定がもたらされたことはよく知られた事実である (Kang, 2010)。

これに対して, 同じ東アジアから発信されている宗教をベースとした関係性論に仏教的な国際関係論がある。安定したヒエラルキーを維持するための儀礼を重んじる儒教に対して, 仏教は常に変化して留まらない世界像を持ってきた。諸行は無常であり, すべてのものは流転する。永遠の存在は「無」であり, 存在は様々な関係性 (縁起) によってその瞬間ごとに生み出される幻でしかない。こうした非常にラディカルな関係性論は間違いなく為政者側の思想ではない。それは病気や老いの苦しみに悩む一般庶民のためのものであった。

3. 宗教, 哲学, 科学の交差点としての仏教

ブッダに始まる仏教は, ブッダの死後多くの分派によって継承された。一口に仏教と言っても, そこには様々なバリエーションがある。大きく分けても, 比較的古代仏教に近いと言われ主として東南アジアに見られる上座部仏教, それに対して「空」の思想を強調し東アジアに広く伝わる大乘仏教, そして密教としてのチベット仏教などがあげられるであろう。これまで仏教は基本的に為政者側と一定の距離を持って展開してきた。近年, 宗派を超えて社会的にコミットする Engaged

Buddhism などはその典型である。これに対して日本の仏教の立ち位置は微妙である。仏教大国として知られる日本であるが、その仏教は独特の展開を見せてきた。17世紀から19世紀にかけての江戸幕府において仏教は政治と緊密な関係にあったし、日本の帝国主義時代にも植民地主義を支持する活動を行っている。仏教を基軸とする哲学を展開した京都学派も同様に戦争を賛美したことはよく知られている (Shimizu, 2011, 2022b)。近年、こうした歴史を批判的に捉える仏教研究者たちが登場し、当時の日本仏教の姿を明らかにしようとする運動も見られる (Nakanishi, 2013, 2016; Otani, Yoshinaga, & Kondo, 2016; Sueki, 2006; Victoria, 1997)。ここではこれ以上詳しくは説明しないが、国際関係学に対する仏教の貢献を考えた時には、この問題は避けて通れない。さらなる研究の進展を期待したい。

国際関係に対する仏教の貢献を考えた時、仏教の中でも特に大乘仏教との関係に焦点を当てる必要があるだろう。よく知られているように、紀元前3世紀あたりに龍樹の登場によって仏教の新しい形が生み出される。修行した僧侶だけが約束されていた涅槃への道を、龍樹はすべての人々に開いたのだ。龍樹は、この新しい仏教の動きは様々に変化した分派と異なり、ブッダのオリジナルな仏教に戻るムーブメントであると主張する (Nāgārjuna, 1995)。その主張の真偽はわからないが、少なくとも龍樹の仏教がその後の仏教の展開に大きな影響を与えたことは間違いない。なぜなら、仏教の教えが一般の人々に開かれることによって、仏教は新しい存在意義を持ったからである。その後、このインドでの新しい展開は中国を通して東アジアへと広範に伝搬された。ヒンドゥーに取り込まれて事実上消滅したインド仏教と異なり、東アジアの仏教は伝播以来脈々と独自の地位を築いてきた。中国では天台宗、華嚴宗、浄土宗、禪宗などに分かれ、それはそのまま日本へと伝わった。様々な宗派が見られる大乘仏教であるが、それらを通底するのは、関係性についての概念である。

大乘仏教には、他の関係性論と大きく異なる点がある。それは哲学や科学との親近性である。西洋哲学におけるスピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ、ハイデガー、そして現代においてはメイヤスーと仏教との近似性についてはこれまでも様々な形で指摘されてきたが、近年特に注目されているのが大乘仏教と量子論との近似性である。仏教における関係の概念は「縁起」と呼ばれる。これは *dependent origination* とも訳され、その訳の通り存在は常に関係に依存していることを表している。私たちが存在としていると考える全てのものは現象であり、それは儚い命しか持っていない。そしてその存在は関係によって成り立っているものであり、そのみが独立して存在している訳ではないことが多くの仏典で繰り返し述べられる。これは特に大乘仏教で特徴的であり、多くの大乘仏教の宗派ではこの関係によって成り立っている世界を「空」という言葉で表す。他の存在の前に自己の存在はあり得ず、自己と他者を生み出すのは関係でしかないのだ。つまり、関係の前には何も無い、それはまさに「空」なのだ。

仏教をモチーフに独自の哲学を展開した京都学派は空の考え方を取り入れ、いわゆる無の哲学の系譜を生み出した (Nishida, 1947, 1948)。そこでは主体は無であり、関係によって生み出されるという前提に立って、新たな哲学を展開した。しかし、彼らの哲学は必ずしも西洋哲学を否定するものではなく、逆に西洋哲学をさらに進展させるための哲学であった (Sakai, 2010a, 2010b)。彼らが主張したのは、主体の空虚さと存在の脆さであり、さらには西洋・東洋という分断を根底で繋ぐ人間存在の哲学であった (Nishida, 1951)。その意味で、京都学派哲学の現代の世界に対する貢献は

計り知れない。しかし、同時に京都学派の哲学は日本の思想史上最も忌まわしい存在でもある。第二次大戦期の仏教団体と同じように、彼らもまた植民地主義を肯定し日本の帝国主義的な領地拡大を支持してしまったのだ (Kosaka, Nishitani, Koyama, & Suzuki, 1943)。紙面の都合上、この問題もこれ以上触れることはできないが、興味のある読者は、京都学派の戦争協力に特に焦点を当てた様々な研究を参照いただきたい (Arisaka, 1996; Heisig & Maraldo, 1995; Osaki, 2019; Shimizu, 2011, 2015, 2022a; Yusa, 1995)。

では、こうした主体の儚さを前提とした大乘仏教はどのような形で科学と交わるのであろうか。最近出版されたイタリアの量子物理学の第一人者である Carlo Rovelli の *Helgoland* には仏教のための章が存在する。量子論は周知のように、究極のミクロの世界を研究する物理学の分野であるが、そこでは奇妙なことに量子レベルで世界を見た時に、そこには何も本質的には存在しないということが明らかになってきた。我々が存在とみなしているのはすべて現象であり、それは他の関係によって生み出されるのだ (Rovelli, 2020)。これは物質の最小単位が波であることによる。この波は観測者が観測した瞬間に粒になる。波は他者との関係が成立した途端消えてしまうのである。いわゆる「collapse of the wave function」と呼ばれる現象である。この現象は、すべての存在が縁起によって成り立つという大乘仏教の思想と重なり合う。大乘仏教においても、すべての存在は自立して存在している訳ではなく、縁起という関係によって現れているのだ。

4. 仏教の提示する世界観と現代の国際関係

では、この現象としての存在という考え方は国際関係というフィールドにおいて何を意味しているのであろうか。Karin Fierke はポストコロニアルな文脈から、私たちの前に現れてくる様々な事象はスナップショットであると言う (Fierke, 2022)。常に変化していく世界を目撃する観察者として主体 (自己) は存在し、その関係が自己と他者を生み出す。自己と他者は前もって存在しているのではなく、関係性によって生み出されるのだ。その意味で、自己と他者は固定的な関係ではない。それは今、ここでのみ見られる現象なのだ。

この存在論的な議論は、Chengxin Pan による Quantum Holography の考え方とも重なってくる (Pan, 2020)。そこでは部分は全体の一部ではなく、同時に全体を映し出す鏡でもある。一部は全体であり、全体は一部である。この表現は大乘仏教の中でも華嚴教の考え方と親和的である。そこでも同様に、「一即多」の考え方が唱えられる。多くの部分 (多) は全体 (一) の異なる表象である。これは Global IR という文脈で意味を持つ。様々な地域からの IR は、単に国際関係という全体の部分ではなく、全体の鏡としての部分なのである。つまり現在の国際状況は地域ごとにそれぞれの形で地域化され、それが逆に国際関係全体に影響を及ぼす。それは全体と部分という空間的な関係だけではなく、全体=部分という時間的な関係、すなわちプロセスとしての関係なのである。

さらに言えば、大乘仏教は研究者という立場についても示唆的である。大乘仏教には菩薩と呼ばれる独特の存在が指定されている。菩薩とは、成仏するだけの徳を持ちながらも涅槃に入らず、俗世間に残り一般の人々の成仏のために活動する人々を指す。菩薩は人々の苦しみや困難に寄り添い、共に徳を積む存在と言えるであろう。彼・彼女は第三者的に人々を眺めるのではなく、そうした人々の苦難を積極的に背負い込む。そこに菩薩の存在意義がある (Shimizu & Noro, 2021)。翻って、私たち研究者の立場とはなんであろうか。菩薩の存在は、私たちに国際関係に対するエンゲ

ジメントの意味を問うことを迫る。私たちはなぜ国際関係を学ぶのか、無常の世界における研究者の倫理とは何か、この問いは永遠に問い続けなければならない。

最後に、こうした仏教からの視点に対しては、批判的な分析がなされねばならないことも述べておこう。なぜなら、非本質的な仏教の教えは簡単に本質化されるからである。少なくとも、歴史的にはそうした事例は非常に多い。本稿の中で言及した日本仏教の戦争協力や京都学派による帝国主義の肯定は、詳しく厳しい目から検証されなければならない。その意味で、仏教と国際関係についての研究は、その教義から引き出される思想的な側面と政治との関係についての仏教史との二つの側面からなされる必要があるであろう。

ケーススタディ：先島諸島の基地問題

では、こうした仏教的な視点からの国際関係理論の展開は、どのように具体的な文脈に落とし込むことが可能であろうか。ここでは先島諸島における自衛隊基地の設置問題を取り上げてみよう。周知のように現在、沖縄県の実島諸島、石垣島、与論島、宮古島は自衛隊の基地問題で揺れている。石垣島においては2015年に防衛省が石垣市に陸上自衛隊の配備を要請し、2018年に石垣市はその受け入れを承認、2023年3月には正式に駐屯地が開設された。与那国島においては、2016年に駐屯地が開設され、現在航空自衛隊第53警戒隊の一部が配備されている。宮古島では、2019年に駐屯地が開設され、現在では700名前後の自衛隊員が駐留している。同様に鹿児島県の奄美大島の奄美市および瀬戸内町でも2019年にそれぞれ駐屯地が開設されている。これらの駐屯地は中国の軍事的脅威に対するものとして位置付けられており、宮古、与那国、奄美、瀬戸内は2013年の閣議で決定された26中期防（中期防衛力整備計画）、石垣については31中期防に基づいて建設が進められた。

これらの動きに対して一般の市民は、一方で尖閣諸島問題が中国との直接的な軍事衝突に対する不安を抱きながらも、他方で基地の配備については賛否が二分される状況にあった。特に先島諸島においては2014年に反対が53%、賛成は33%となり、必ずしも基地の開設について好意的な意見ばかりではなかった。この状況下、2019年に石垣島の有権者の1/3を超える住民による住民投票条例の制定請求がなされたが、市議会はこれを否決。住民はこれを受け、那覇地裁に投票できる地位の確認などを求めて訴訟を起こした。2023年5月、那覇地裁は提訴後の2021年に市自治基本条例の住民投票についての条項が削除されたことを理由に、住民側の主張を退けた（OkinawaTimes, 2023）。同様の住民の意思の無視は、2019年に沖縄県で行われた辺野古基地の埋め立てについての住民投票にも見られる。そこでは投票率52.48%、反対が71.7%という圧倒的な結果となったが（沖縄県, 2023）、日本政府はこれを黙殺した状態であり、辺野古基地の建設は今でも進められている。

では、これらの基地問題は、仏教・量子論的な視点からどのように説明できるのであろうか。仏教的・量子論的国際関係を具体的なケースに落とし込む時の一つの重要な問題は「全体」と「部分」とをどのように設定するのか、というところにある。「全体」という概念は、極端に大きくとれば宇宙全体と措定することも可能であるし、小さく考えれば日本の安全保障という枠組みもまた可能である。しかしながら、もし我々の議論の焦点が基地問題であり、安全保障であるとすれば、「全体」を表すものとして適切であると考えられるのは世界の安全保障もしくは東アジアの安全保

障あたりであろう。もし直接的に先島諸島の基地問題と関連してくるアクターが、日本、中国、台湾、北朝鮮、であるとすれば、「全体」として東アジアを措定することが適切であると言えるだろうし、これに米国、ロシアを加えるとすれば世界の安全保障、もしくは世界的な秩序形成が「全体」を体現すると言えるであろう。現在の政治経済の緊密な相互依存・ネットワーク化を考えれば、「全体」については出来るだけ大きくとることが適切である。緊密な相互依存・ネットワーク化は具体的なケースに関連するファクターが広範囲に及ぶことを意味しており、今後も「全体」概念はより大きくなっていくことが考えられる。

では、「部分」についてはどうであろうか。先島諸島の基地問題という問題設定を考えれば、「部分」が先島諸島を指すのが通常であろう。しかし、これは必ずしも自明ではない。なぜなら上述のように、本問題にはさまざまな人々の生活が影響を受けており、そうした人々はそれぞれに異なるパースペクティブを持っているはずである。首長、議員、NGO、活動家、メディア、そして住民というように、とりあえず措定した「部分」は更に細分化することが可能である。

では、東アジアの安全保障という「全体」と先島諸島や沖縄の人々という「部分」はどのように説明できるのであるか。明らかなのは、住民投票などの動きを通じた沖縄の人々の意思表示であり、これは日本の安全保障政策の鏡となっている。アメリカの国防戦略の一部としての日本の安全保障政策は、住民の声を聞くどころか、逆に黙殺するような方向に進んでいる。安全保障という枠組みはもはや一国の政策で成り立つものではなく、世界全体を包含するリバイアサンなのである。国家安全保障は世界秩序の枠組みの中でのみ成り立ち、さまざまな地域のローカルな犠牲の上に成り立つものであることを、先島諸島、辺野古の基地の問題は明確に示している。

では、「全体」が「部分」を映し出すことはないのだろうか。少なくとも、「全体」を日本の安全保障、「部分」を先島諸島と措定すれば、「全体」が「部分」を映し出しているとは言えない。日本の安全保障が反映しているのは、「部分」としての先島諸島や沖縄ではなく、米国の国防戦略なのだから。では、「部分」はどこにもその姿を映し出すことはないのだろうか。一つの可能性は、「全体」についてより詳細に考えることによって生み出されてくる。たとえば、沖縄の住民投票について日本政府は具体的な対応を行っていないが、2021年1月までに199の地方議会で沖縄の民意を反映すべきであるという意見書・決議が採択されている（沖縄県知事公室、2023）。他方、「全体」をより大きくとれば、先島や沖縄の人々の国境を超えた海外との繋がりと側面が見えてくる。先島・沖縄の人々は単に日本の安全保障という枠組みだけでなく、それ以外の場で関係性を確立してきた。例を挙げると、与那国や石垣の人々の台湾との交流がある。与那国では戦前から台湾北部の人々との交流が定期的に行われており、現在でも小学生の交流などの形で続いている（Chen & Shimizu, 2019）。さらには沖縄のNGO活動家が反戦の国際的な連帯した活動を韓国のNGOとの間で行っている（Platoformc.kr, 2023）。このように「全体」として東アジアを考えれば、「部分」が「全体」の中に潜り込み、後者を変革するような動きとなっていくことが考えられる。こうした道筋で「全体」が「部分」によって作り替えられていく可能性も非常に高いのである。

結 論

本稿では、仏教、量子論、国際関係理論という枠組みの可能性を考えてきた。そこでは「全体」

と「部分」との関係性が、必ずしも一方通行ではなく、相互に構築していくという道筋について議論した。ケーススタディにおいては先島諸島や沖縄の基地問題を取り上げ、この「全体」と「部分」との相互依存関係を具体的な文脈に落とし込み、それがどのような意味を持つのか、という点について検討した。本稿の意図は、あくまで異なる視座を提供するという点にあるのであって、この視座が現在の東アジアや先島諸島、そして沖縄の状況をドラスティックに変化させる、という主張を展開するものではない。なぜなら、国際関係とはまさにこの視座を通して構築されるものであって、その主体はあくまでも人々であるからだ。つまり新しい視座の提供は、国際関係の変化の前提条件となっても、その主体とはなり得ないのである。逆に、本文中でも述べたが、この視座が絶対視されるようになる時、この視座は新たなリバイアサンを生み出すことになるであろう。重要なのは、現在の世界に対する視線を相対化することであって、新たな絶対性を生み出すことではないのである。

参考文献

- Arisaka, Y. (1996). The Nishida Enigma: 'The Principle of the New World Order'. *Monumenta nipponica*, 51 (1), 81.
- Behera, N. C. (2007). Re-imagining IR in India. *International Relations of the Asia-Pacific*, 7 (3), 341-368. doi: 10.1093/irap/lcm014
- Chan, S., Mandaville, P., & Bleiker, R. (Eds.). (2001). *The Zen of International Relations: IR Theory from East to West*. Basingstoke: Palgrave/Macmillan.
- Chen, C.-C., & Shimizu, K. (2019). International relations from the margins: the Westphalian meta-narratives and counter-narratives in Okinawa-Taiwan relations. *Cambridge Review of International Affairs*, 32 (4), 521-540. doi: 10.1080/09557571.2019.1622082
- Fierke, K. M. (2022). *Snapshots from Home: Mind, action, and strategy in an uncertain world*. Bristol: Bristol University Press.
- Heisig, J. W., & Maraldo, J. C. (1995). *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, and the Question of Nationalism*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Jackson, P. T., & Nexon, D. H. (1999). Relations before states: Substance, process and the study of world politics. *European Journal of International Relations*, 5 (3), 291-332. doi:10.1177/1354066199005003002
- Kang, D. C. (2010). *East Asia before the West: Five Centuries of Trade and Tribute*. New York: Columbia University Press.
- Kosaka, M., Nishitani, K., Koyama, I., & Suzuki, S. (1943). *Sekaishiteki Tachiba to Nihon* [Japan and the World Historical Standpoint]. Tokyo: Chuo Koron.
- Long, W. J. (2021). *A Buddhist Approach to International Relations: Radical interdependence*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Nakanishi, N. (2013). Shokuminchi Chosen to Nihon Bukkyo [Japanese Buddhism and Colonial Korea]. In. Kyoto: Saninsha.
- Nakanishi, N. (2016). *Shokuminchi Taiwan to Nihon Bukkyo*, [Japanese Buddhism and Colonial Taiwan]. Kyoto: Saninsha.
- Nishida, K. (1947). Zen no Kenkyu [An Inquiry into the Good]. *Nishida Kitaro Zenshu*, 1, 1-200.
- Nishida, K. (1948). Watashi to Nanji [I and You]. In *Nishida Kitaro Zenshu* [Collected Works of Nishida Kitaro] (Vol.6, pp.341-427). Tokyo: Iwanami.
- Nishida, K. (1951). Nihon Bunka no Mondai (lecture) [Problem of Japanese Culture (lecture)]. In *Nishida Kitaro Zenshu* [Collected Works of Nishida Kitaro] (Vol.14). Tokyo: Iwanami.
- Nordin, A. H. M., Smith, G. M., Bunschoek, R., Huang, C. C., Hwang, Y. J., Jackson, P. T., . . . Zalewski, M. (2019). Towards global relational theorizing: a dialogue between Sinophone and Anglophone scholarship on relationalism. *Cambridge Review of International Affairs*, 32 (5), 570-581. doi:10.1080/09557571.2019.1643978

- Nāgārjuna. (1995). *The Fundamental Wisdom of the Middle Way: Nāgārjuna's Mūlamadhymakārikā* (J. L. Garfield, Trans.). New York: Oxford University Press.
- OkinawaTimes. (2023). [社説] 石垣住民投票訴訟 住民自治軽視の判決 | 社説 | 沖縄タイ★★ス+プラス. Retrieved from <https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1157810>
- Osaki, H. (2019). *Nothingness in the Heart of Empire: The moral and political philosophy of the Kyoto School in Imperial Japan*. Albany: State University of New York Press.
- Otani, E., Yoshinaga, S., & Shuntaro, K. (Eds.). (2016). *Kindai Bukkyo Studies: Bukkyo karamita mohitotsuno kindai* [Modern Buddhist Studies: Another modernity through Buddhism]. Kyoto: Hozokan.
- Pan, C. (2020). Enfolding wholes in parts: quantum holography and International Relations. <https://doi.org/10.1177/1354066120938844>. doi:10.1177_1354066120938844
- Platoformc.kr. (2023). 危機の北東アジア, 沖縄・韓国反戦平和連帯の道を問う. Retrieved from <https://platformc.kr/2023/05/japan-meeting>
- Qin, Y. (2018). *A Relational Theory of World Politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rovelli, C. (2020). *Helgoland: Making sense of the quantum revolution* (E. Segre & S. Carnell, Trans.). New York: Riverhead Books.
- Sakai, N. (2010a). Pax Americana no motodeno Kyoto Gakuha no Tetsugaku [The Kyoto School Philosophy under Pax Americana] (H. Takahashi, Trans.). In N. Sakai & J. Isomae (Eds.), *'Kindai no Chokoku' to Kyoto Gakuha: Kindaisei, Teikoku, Fuhensei* ['Overcoming Modernity' and the Kyoto School: Modernity, Empire, and Universality] (pp.1-28). Tokyo: Ibunsha.
- Sakai, N. (2010b). Toa Kyodotairon to Fuhensei wo Megutte: Shutaiteki Gijutsuron Josetsu [on the East Asian Cooperative Body and Universality: An Introduction to the Theory of Subjective Technology. In N. Sakai & J. Isomae (Eds.), *Kindai no Chokoku to Kyoto Gakuha: Kindaisei, Teikoku, Fuhensei* [The Overcoming Modernity and Kyoto School: Modernity, Empire, Universality] (pp.123-162). Tokyo: Ibunsha.
- Shani, G. (2007). 'Provincializing' critical theory: Islam, Sikhism and international relations theory. *Cambridge review of international affairs*, 20 (3), 417-433.
- Shani, G. (2008). Toward a Post-Western IR: The 'Umma,' 'Khalsa Panth,' and Critical International Relations Theory. *International studies review*, 10 (4), 722-734.
- Shih, C. Y., & Hwang, Y. J. (2018). Re-worlding the 'West' in post-Western IR: the reception of Sun Zi's the Art of War in the Anglosphere. *International Relations of the Asia-Pacific*, 18 (3), 421-448. doi:10.1093/irap/lcy009
- Shimizu, K. (2011). Nishida Kitaro and Japan's interwar foreign policy: war involvement and culturalist political discourse. *International Relations of the Asia-Pacific*, 11 (1), 157-183. doi:10.1093/irap/lcq021
- Shimizu, K. (2015). Materializing the 'non-Western': two stories of Japanese philosophers on culture and politics in the inter-war period. *Cambridge Review of International Affairs*, 28 (1), 3-20. doi:10.1080/09557571.2014.889083
- Shimizu, K. (2018). The Genealogy of Culturalist International Relations in Japan and Its Implications for Post-Western Discourse. *All Azimuth-a Journal of Foreign Policy and Peace*, 7 (1), 121-136. doi:10.20991/allazimuth.326972
- Shimizu, K. (2022a). A Non-Western Attempt at Hegemony: Lessons from the Second-Generation Kyoto School for International Pluralism and Its Discontents. *Global Studies Quarterly*, 2 (4). doi:10.1093/isagsq/ksac073
- Shimizu, K. (2022b). *The Kyoto School and International Relations: Non-Western Attempts for a New World Order*. Abingdon: Routledge.
- Shimizu, K., & Noro, S. (2021). Political healing and Mahayana Buddhist medicine: a critical engagement with contemporary international relations. *Third World Quarterly*. doi:10.1080/01436597.2021.1891878
- Sueki, F. (2006). *Shiso toshitenno Bukkyo Nyumon* [Introduction to Buddhism as Thought]. Tokyo: Transview.
- Trowsell, T. A., Querejazu, A. E., Shani, G., Behera, N. C., Reddekop, J., & Tickner, A. (2019). Recrafting International Relations through Relationality. Retrieved from <https://www.e-ir.info/2019/01/08/recrafting-international-relations-through-relationality/>
- Trowsell, T. A., Tickner, A. B., Querejazu, A., Reddekop, J., Shani, G., Shimizu, K., . . . Arian, A. (2021). Differing about Difference: Relational IR from around the World. *International Studies Perspectives*, 22 (1), 25-64. doi:10.1093/ispp/ekaa008
- Victoria, B. A. (1997). *Zen at War*. New York: Weatherhill.

- Yusa, M. (1995). Nishida and totalitarianism: a philosopher's resistance. *Rude awakenings: zen the Kyoto School*, 107-131.
- 沖縄県. (2023). 沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Q&A Book 令和2年版／沖縄県. Retrieved from https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/kichitai/tyosa/qanda_r2.html
- 沖縄県知事公室. (2023). 沖縄の基地問題～普天間・辺野古・日米地位協定～. Retrieved from <https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/henoko/documents/okinawa-base-problem-overview.pdf>